

追想：18期生

高校18期（1966年卒） 東中 幸久

「おーいガッチュウ（私のあだ名でした）、ちょっと来い」。その声は暗い部室の中から聞こえてきました。恐る恐る覗いてみると、そこには先輩の松永さんがいました。松永さんは、小・中学生時代からの先輩です。「何ですか？」と聞くと、「お前ハンドボールやらんか？今日の放課後、近くの公園でやっている練習を見に来い」と命令に近い口調で言われたのが、私とハンドの出会いでした。それまでハンドボールなんて知らなかったのです。入学後、学校生活にも慣れてきていたこともあり、見に行こうかなと気楽に考え、放課後公園へ出かけてみました。そこでは、14人位の部員がグループに分かれ、1個のボールを苦しそうな顔で追いかけていました。あとで知ったことですが、これがノックだったのです。「な～んや。えらい簡単な運動やな」と思い、翌日入部を決めたのです。

あの日から50年以上の時間が流れた今、過去を振り返ることは決して易しいことではありません。ただ、我々18期生の仲間を一人ひとり思い出しながら私自信を振り返ることは、忙しい日常の中で埋没してしまっている「生き方の原点」を見つめ直させてくれる良い機会だと考え、この寄稿文を書くことにしました。

我々18期生のメンバーは、全員がハンドボールに向けた身体能力を備えていませんでした。試合開始時に、センターラインで相手メンバーと向き合った時、常に感じたことは、「この遅い連中と戦えるのだから

うか？」という不安感でした。それでも、2年目の厳しい合宿を乗り切った後、残ったメンバーは7人しかいなかったため、この体制で試合に臨むしかなかったのです。広瀬が、縄田が、大野が細い体を震わせながら走っています。為広が、佐藤が、小さな体で相手メンバーにディフェンスを仕掛け倒されています。真っ黒に日焼け（元からだったかも？）したキーパーの久岡が、大きな声で喚いています。私も「なんとか1点を！」との思いで、ダッシュを繰り返しています。試合で思い出すのはこの光景ばかりです。勝った時の喜び、負けた時の悔しさはほとんど覚えていません。

覚えていることは、練習の厳しさと、その練習に関わった人達（先輩諸兄です）との交流です。赤鬼の形相で基礎体力を築いていただいた前田氏、小粒揃いのチームになんとか得点力を与えようと、フォーメーションプレイを叩き込んでいただいた林氏、この両名の先輩は、私の記憶に強く焼きついています。残念ながら前田氏は早逝されましたが・・・・・・・・・・。

ここで、昭和37年1月発行の「高津クラブハンドボール部誌」に寄稿された田中先生の文章を引用させていただきます。

「ハンドボール部としては、創設以来指導者に恵まれませんでした。しかし、次から次へと上級生から下級生へ、先輩から後輩へと自分たちの手でクラブを造り上げ、自らの手で指導してきたわけです」。この抜粋文章が、高津クラブの伝統を如実に物語

っていることは間違いのない事実でしょう。

私自身ここまで無事に生きてこられたのは、高津ハンドボール部での2年半の練習があったからだと考えています。自分だけでは決してできない練習を、仲間と先輩に後押しされて乗り切れた余力が大きな自信となり、今の私を形成していると言っても過言ではありません。

この寄稿文を書くにあたり先ず行ったことは、記憶の片隅に埋もれていた諸先輩の名前をノートに書き出すことでした。近い先輩から遠い先輩まで、思い出すままに書いていったのですが、その内に名前とその先輩方のプレイが重なるようになりました。

豪快なシュート、華麗なシュート、重厚なガード、トリッキーなジャンプ。それらの姿が次々に浮かんできたのです。本来なら一人一人の名前と、その方達のエピソードを記したかったのですが、それは次の機会に譲ることとし、今回は紙面を借りて感謝の気持ちを述べるに留めます。有難うございました。

最後に、現役の皆さんへ。

高津ハンドボール部の先輩には個性豊かな方々が沢山おられます。その方々の特性を承継し、強いチームを創って行って下さい。祈っております。

